

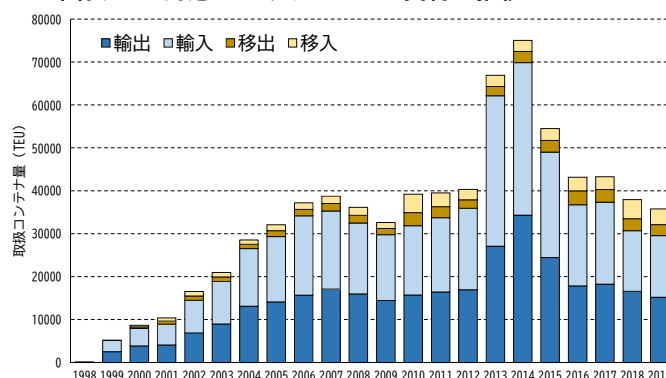
東三河地域における農産物等の輸出の動き

1. 三河港の貿易

- 三河港は、昭和 39 年に「工業整備特別地域」並びに「重要港湾」に指定されたことを受け、港湾整備や臨海部開発が進められた。高度成長期は、鉄鋼（当時の日本鋼管の誘致／失敗）等の重化学工業の誘致が進められたが、昭和 48 年の第一次オイルショックを契機に産業構造の転換が進み、昭和 54 年に約 400ha の用地で自動車生産（トヨタ田原工場）が開始されたのを受け、自動車産業の集積が進んだ。その後、三河港がトヨタ自動車の北米輸出拠点（欧州の輸出拠点は名古屋港）となり、完成車輸出が急速に進むこととなった。
- 昭和 60 年代に入り、家計の可処分所得が高まる中、外国車の需要が首都圏以外にも広がり、輸入基地整備のニーズが高まり、首都圏と近畿圏の中間で交通アクセス利便性や安価な用地確保等の観点から、三河港での輸入基地整備が進んだ。
- この結果、三河港は完成車輸出で全国 2 位（1 位は名古屋港）、輸入は 10 年以上にわたって全国 1 位（数量、金額）となり、「**自動車港湾**」として位置づけられている。
- 平成に入り、コンテナ貨物需要が高まる中、三河港では平成 10 年にコンテナターミナルが整備された。コンテナ取扱量は、徐々に増加したが、リーマンショックを契機に減少に転じた（図表 1）。こうした中、2013 年からはトヨタ自動車によるロシア向けのノックダウン輸出により、急激に伸びたが、それが終了すると再び減少し、2020 年もコロナの影響で減少傾向にある。
- 三河港がある三河湾は、水深が浅いため、大型のコンテナ船の入船が難しく、浚渫等により大きな費用を擁することになるが、自動車船は喫水が浅いため、問題なく航行できる。また、広域幹線道路網として、東名高速道路、新東名高速道路等の整備が進んでいるが、名古屋港と比べて、こうした道路網とのアクセス利便性が相対的に低く、貨物の集荷・出荷の環境条件が悪い（図表 2）。
- こうした中、コンテナ貨物助成金等のインセンティブを設けているが、増加に転じるまでには至っ

ていないため、交通インフラの改善とともに、広域的な集荷の仕組みづくりが急務である。

■図表 1 三河港におけるコンテナ貨物の推移



資料：三河港振興会資料をもとに HRRC 作成

■図表 2 三河港・名古屋港のアクセス条件

■三河港	豊川 I.C.～神野埠頭（カモメリア）	30 分
■名古屋港（I.C. は隣接、埠頭内に設置）		
飛島埠頭：	コンテナターミナル等／飛島 I.C.	
金城埠頭：	自動車積出等／名港中央 I.C.	
潮見埠頭：	自動車積出等／名港潮見 I.C.	
新宝埠頭：	自動車積出等／東海 I.C.・東海新宝 I.C.	

資料：三河港振興会・名古屋港資料をもとに HRRC 作成

2. 農産物・加工品の輸出の動き

(1) 全国的な動き（図表 3）

- 2020 年における農林水産物・加工品の輸出額は、約 9,257 億円で、コロナ渦にも関わらず、対前年比プラス約 136 億円である。輸出品目の中で、比較的金額が大きく、過去 4 年間で概ね増加している品目をみると、100 億円以上では「ソース混合調味料」「清涼飲料水」「清酒」「素材（丸太）」「緑茶」「粉乳等」である。特に 2019～2020 年に増加金額が大きいのは、「清涼飲料水」「ソース混合調味料」であるが、「インスタントコーヒー」も急激に伸びている。加工品を除くと、「粉乳等」「鳥卵・卵黄」等の輸出額が大きい、「いちご」「野菜」なども一定程度の輸出規模となっている。
- 輸出先は、香港、中国、韓国等のアジア諸国・地域が多くなっており、特に香港は 2020 年、政情が不安視されていたが、多くの品目で輸出先として非常に多くなっている。

■図表3 農林水産物の輸出動向

	数量				金額（百万円）				4年間の 金額動き	2017～ 2020年の増 加金額
	単位	2017	2018	2019	2020	2017	2018	2019	2020	
鳥卵・卵黄	トン	4,055	6,031	8,841	18,214	1,251	1,694	2,358	4,686	全て上昇 3,434
粉乳等	KG	5,357	5,953	7,449	9,524	8,398	8,827	11,263	13,714	全て上昇 5,316
米	MT	35,529	45,567	48,688	40,938	4,357	5,158	6,059	6,288	全て上昇 1,931
即席麺	トン	9,235	9,884	9,078	12,106	5,837	6,258	6,002	8,556	概ね上昇 2,719
ぶどう（生鮮）	トン	1,339	1,492	1,385	1,712	2,943	3,267	3,190	4,118	概ね上昇 1,175
いちご	トン	889	1,238	962	1,179	1,799	2,531	2,107	2,630	概ね上昇 832
果汁	トン	4,564	5,663	7,431	9,138	2,034	2,609	3,357	3,774	全て上昇 1,740
野菜（生鮮・冷蔵）	トン	15,427	5,343	13,385	49,696	1,493	1,138	1,409	2,745	近年上昇 1,251
キャベツ（芽キャベツ除く）等	トン	1,848	1,011	1,043	1,669	213	177	156	358	近年上昇 146
だいこん・ごぼう等	トン	362	380	371	665	75	95	74	160	概ね上昇 85
かんしょ（生・蔵・凍・乾）	トン	2,652	3,520	4,347	5,268	971	1,379	1,695	2,062	全て上昇 1,091
砂糖（精製）	MT	1,435	1,581	1,543	1,859	226	271	261	333	概ね上昇 107
インスタントコーヒー	トン	1,365	1,482	2,014	6,170	2,363	2,792	3,493	9,231	全て上昇 6,868
緑茶	トン	4,642	5,102	5,108	5,274	14,357	15,333	14,642	16,188	概ね上昇 1,830
味噌	トン	16,017	17,010	18,434	15,995	3,333	3,518	3,824	3,844	全て上昇 511
ソース混合調味料	トン	55,156	60,097	63,191	66,350	29,590	32,539	33,657	36,542	全て上昇 6,952
清酒	千L	23,482	25,747	24,928	21,761	18,679	22,232	23,412	24,141	全て上昇 5,462
清涼飲料水等	千L	104,979	109,560	126,747	145,238	24,505	28,167	30,391	34,164	全て上昇 9,659
ペットフード	MT	1,813	2,579	2,502	3,072	2,699	3,722	3,573	4,667	概ね上昇 1,969
配合調製飼料	MT	21,030	17,373	17,498	20,152	6,718	6,915	6,738	7,792	概ね上昇 1,074
素材（丸太）	千CM	971	1,137	1,130	1,384	13,683	14,800	14,714	16,339	概ね上昇 2,656
針葉樹製材	千CM	126	142	143	170	4,847	5,545	5,334	6,278	概ね上昇 1,431
生鮮・冷蔵きのこ（はらたけ属を除く）	トン	1,078	926		1,049	358	323		539	181
しいたけ（乾燥）	トン	26	24		33	166	139		220	55
農林水産物輸出計（億円）	-	-	-	-	-	8,071	9,068	9,121	9,257	

出所：農林水産物輸出入概況（農林水産省国際部国際経済課）を利用してHRRCが作成。

※増加金額が20億円以上のセルを色づけ

※金額が30%以上のセルを色づけ

2020年 輸出先 上位3国									上位3国 のシェア	
1位	数量 割合%	金額 割合%	2位	数量 割合%	金額 割合%	3位	数量 割合%	金額 割合%	数量 割合%	金額 割合%
香港	98	96	シンガポール	1	2	タイ	0	0	99	99
ベトナム	59	67	台湾	17	12	香港	7	9	83	87
香港	17	29	シンガポール	9	12	台湾	5	10	31	51
香港	35	30	アメリカ	23	23	中国	5	8	63	61
香港	52	51	台湾	43	42	シンガポール	4	4	98	97
香港	79	76	台湾	8	8	シンガポール	7	7	94	91
中国	37	34	香港	31	18	アメリカ	4	10	71	63
台湾	80	49	香港	6	29	シンガポール	2	9	88	88
香港	75	71	シンガポール	25	28	タイ	1	1	100	100
香港	77	57	シンガポール	20	23	韓国	0	8	97	88
香港	51	49	タイ	22	23	シンガポール	17	18	91	91
台湾	45	27	香港	32	23	ドイツ	2	15	79	66
ロシア	40	32	中国	15	23	アメリカ	24	21	79	76
アメリカ	37	52	台湾	27	10	ドイツ	6	7	69	69
アメリカ	26	25	中国	9	9	台湾	6	8	42	41
アメリカ	19	22	台湾	20	18	香港	10	10	49	49
香港	12	26	中国	22	24	アメリカ	24	21	58	71
中国	20	29	香港	15	15	アメリカ	17	13	51	57
韓国	40	39	香港	28	28	台湾	26	27	94	95
中国	30	25	韓国	10	11	台湾	25	11	65	47
中国	84	80	韓国	9	11	台湾	6	6	98	97
アメリカ	31	40	中国	38	21	フィリピン	16	18	85	79
香港	56	57	台湾	23	19	アメリカ	6	9	85	85
アメリカ	42	38	香港	36	33	台湾	6	11	84	82

※上位3か国のシェア50%以上のセルを色づけ

(2) 東三河地域の動き

- ・近年東南アジアでは、甘くしっとりとした食感のサツマイモ（甘藷）の輸出が増加している。焼き芋ブームが広がり、サツマイモに加え、焼き芋セットの輸出も伸びている。需要増加の背景には、「輸出時の植物検疫の制約が少ない」「調理がしやすい」「自然な甘みが消費者に好まれている」「アジア地域で健康志向が高まっている」等があり、サツマイモを重要な輸出品に育てようとする地域も出てきており（例：鹿児島県等）、豊橋市でもサツマイモの試験輸出を開始した。

一方、**国によって求める商品ニーズが異なり、香港、台湾等はSサイズ、タイ等では大きめのLサイズ、シンガポールではMサイズが好まれる**と言われており、様々な国に輸出しようとするれば、国毎にサイズ調整が必要になる。

- ・豊橋市内の鶏卵経営者では、10年以上前から香港への殻付き卵の輸出（輸出先は香港）を行っている。鳥インフルエンザの影響で一時期、取引に影響が出たが、現在は増加基調と言われている。輸出では、船便を利用しているが、残念ながら三河港ではなく、名古屋港を利用している。また、同経営者は、韓国への堆肥の輸出も行っており、輸出に対応できる堆肥づくりのノウハウを持っているが、現在ではかなり少なくなっている。
- ・西三河地域にある豊明花き(株)は、切花・鉢物等の一大市場を形成していることもあり、名古屋空港・中部国際空港と連携し、同時に全国の花き農家らと連携して、(一社)日本植物輸出協議会を組織し、海外輸出を促進している（図表4）。2020年は、コロナの影響もあり、切花の全国輸出額は約7千万円減の約8億円に留まっている。
- ・今後、有望な輸出品として、丸太が挙げられ、九州地方を中心に輸出が進んでいるが、東三河地域では丸太の搬出などに問題（コスト、効率など）があり、なかなか輸出事業として成長していないのが実態である。大型の伐採機械で効率的に伐採し、集材して大型トラックを利用して大量輸送することでコスト削減が期待できるが、山間地域の道路事情が余り良くないために、大型トラックでの輸送が困難な場合が多いことがネックになっている。

■図表4 豊明花き(株)の取組

- ①商品：鉢物・切花・資材
 - ②輸出先：香港、シンガポール、オーストラリア
 - ③取組：花き生産額1位の愛知県、多様な品目を生産する長野県を懐に抱え、生産農家らを主軸に関係機関や団体が参画する(一社)日本植物輸出協議会を組織し、花き産業を発展させるために輸出拡大を目指す。
 - ④背景
 - ・日本国内の花き需要は減少。日本の花き産業には、他国にはない丁寧で手間を惜しまない高度な生産技術が確立。日本産花き商品の品質の高さは独自の価値として広く知られ、海外ニーズは大きい。
 - ・市場でリパック業務を行い、多品目、小ロット、多頻度での細かな海外ニーズへの対応が可能。
- <課題解決のポイント>
- ・名古屋植物防疫所の協力によって輸出される商品を**市場内で一括検疫できる仕組み**を構築（2018年121回実施）。輸出専用の保冷作業所、冷蔵庫を整備。
 - ・空港、港と連携し情報共有を密に行い、安定的な輸出拠点を確立。少量多頻度出荷に対応できる輸出体制を構築しトラブルにも対応（2018年空路279回出荷）。
 - ・協議会を組織化し、国際展示会への出展、日本産花きを使ったデモンストレーションやワークショップ、生産地に海外バイヤーを招聘するなどブランドの確立に向けて組織立った普及啓蒙活動を実施。

資料：農林水産省ホームページより作成
(<https://www.maff.go.jp/j/shokusan/export/attach/pdf/101-1.pdf>) をもとに HRRC 作成

(3) 自治体による輸出の取り組み

- ・2004年11月、民間による「IT農業研究会」（事務局：(株)サイエンス・クリエイト、東三河地域研究センター）において、「守りから攻めの農業」と題するセミナーを行い、農産物輸出の検討が具体的に動き出した。2006年のセミナーでは、農産物輸出の検討報告が行われ、自治体を交えた具体的な検討が開始された（図表5）。その後、輸出事業は、豊橋田原広域農業推進会議（豊橋市・田原市、2JAで構成）で進められ、近年は県境を越えて浜松市、飯田市との広域的な連携を進めている。
- ・こうした取り組みもあり、毎年一定量の輸出が行われるようになってきているが、まだまだ取引量は少なく、農業関係機関では依然として国内市場も一定程度あり、無理して輸出を進めていくことの必然性を疑問視している。
- ・一方で、輸出事業を契機に鮮度保持の仕組み（鮮度保持のためのパッキングフィルムの開発など）が開発される等、他でも活用できる技術などの開発が進んでおり、輸出を契機とした取組が他分野に波及することも出始めている。

■図表5 自治体等による農産物輸出の取り組み

2005 年 1 月	IT 農業研究会 次郎柿のテスト輸出開始 (香港)
2006 年度	次郎柿輸出 0.3t
2007 年度	次郎柿 0.8t、アールスメロン 1t
2008 年度	資料なし
2009 年度	次郎柿 1.2t、アールスメロン 2.8t ・第 7 回中国花卉博覧会へ出展 (グロリオサ、スイートピー、アルストロメリアなど)
2010 年度	次郎柿 2.4t、アールスメロン 3.5t FOOD EXPO への出展 (植物工場システム: エディブルフラワーの人工栽培システム)
2011 年度	次郎柿 1.0t、アールスメロン 2.8t
【最近の取組】	
※①輸出量/②利用コンテナ/③輸出港・空港/④リードタイム/⑤輸出形態/⑥その他	
a. 次郎柿 (ケース 1)	
①10 トン以上 (2019 年度) / ②形態: リーフアーコンテナ / ③東京港・横浜港→シンガポール / ④リードタイム: 約 2 週間 / ⑤国内市場を経由した間接輸出 / ⑥現地日系企業で販売	
b. 次郎柿 (ケース 2)	
①3 トン (2019 年度) / ②形態: 航空便 / ③羽田空港→マレーシア / ④リードタイム: 約 3 日間 / ⑤国内市場を経由した間接輸出、数か月貯蔵後輸出	
c. ミニトマト (ケース 3)	
①1~2 トン (2018 年度) / ②形態: リーフアーコンテナ / ③大阪港・神戸港→香港 / ④仲卸がリパック・リードタイム: 約 1 週間	
d. ミニトマト (ケース 4)	
①1 トン (2019 年度) / ②形態: リーフアーコンテナ / ③大阪港・神戸港→香港 / ④自社にてパック・リードタイム: 約 1 週間	
e. キャベツ (ケース 5)	
①キャベツ 100 ケース (2019 年度) / ②形態: リーフアーコンテナ / ③東京港・横浜港→シンガポール / ④その他: 段ボール箱・リードタイム: 約 2 週間 ※2020 年度はくさい 50 ケース追加	
f. 豊橋産さつま芋 (ケース 6)	
①1 トン (2020 年度) / ②形態: リーフアーコンテナ / ③輸出先: マレーシア / ※JA 経由ではない	
g. 田原産メロン (ケース 7)	
①1 トン以上 (2019 年度) / ②形態: リーフアーコンテナ / ③大阪港・神戸港→香港	

注記: 2012~2018 年度は資料入手できず。

資料: IT 農業研究会資料、豊橋市ヒアリング調査をもとに HRRC 作成

- ・先にサツマイモ輸出の取組事例を紹介したが、これを含め、現在、輸出されている農産物の多くは **国内出荷用に生産されたものを輸出用に転用したものがほとんどで輸出を目的とした栽培が行われている訳ではない**。既に、九州地域の「いちご」等では、輸出向けの「いちご」と国内向けを分けた栽培が行われていると言われており、今後は **消費者ニーズに併せて栽培技術や貯蔵技術を確立し、**

安定的、周年的な輸出を実現するための輸出産地の育成等に取り組んでいくことが必要である。

- ・こうした中、昨年 12 月~今年 1 月にかけて、清水港は、大分港と共同で農産物輸出 (輸出先はシンガポール) の共同輸送試験を実施した。そこでは、静岡県産のみかん、いちご、小松菜、トマトの他、愛知県産の大葉、山梨県産のりんご等を取り扱い (大分港積載農産物を除く)、7 割以上で鮮度が維持されたと発表されている。
- ・現在、三河港から農産物輸出は行われていないが、図表 6 に示した課題を解決し、広域的な集荷の仕組みを構築していくことが必要である。

■図表6 三河港を利用した農畜産物輸出の課題

- | |
|--|
| <p>①鮮度保持: CA コンテナ、リーファーコンテナの活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三河港を中心としたコールドチェーン (冷凍・冷蔵倉庫の整備) の整備 ・鮮度維持温度が異なる農産物の混載対応 <p>②周年を通じた安定的な輸出量の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> ・航路誘致/広域集荷の仕組み (小口貨物 LCL 等) ・海外顧客の確保等 <p>③リードタイム・コストの圧縮</p> <p>④植物防疫所利便性の向上</p> <p>⑤輸出相手国のニーズに合致した農産物栽培の推進</p> |
|--|

※リーファーコンテナ: 冷却装置が付き、一定温度で輸送できるコンテナ。

※CA コンテナ: リーフアーコンテナの一種で、温度だけでなく酸素、CO2 濃度を調整し青果物の貯蔵期間を延長できるコンテナ。

※LCL: Less than Container Load (混載コンテナ)

(4) 農産物輸出の重要性

- ・先に述べたように丸太の輸出は、賦存量から十分な可能性があり、味噌の輸出は長野県では行われている。食品ではないが、中古ピアノ、中古農業機械の輸出も期待できそうである。
- ・輸出振興は、国内市場が縮小化していく中で、有望な市場であり、輸出振興による生産量などの拡大は、生産効率の向上等が期待でき、規模拡大は雇用吸収力を高め、競争優位性のある産業づくりに繋がると考えられる。
- ・同時に、潜在的な輸出品を顕在化させ、発展させていくためには、スケールメリットとともに、IT 等による効率性の向上が是非とも重要になる。昨今、DX 等の利活用領域が広がっているため、輸出分野においても DX 等を積極的に導入していくことが必要であろう。